



あるべき教育課程

山本雅行

「先生 僕サッカー部辞めた」……これは『『教科内容』を軸に体育実践に『体育実践にを創る』新しい風を』第4章 ゲームと技術の「階層システム」をサッカーで学ぶ（1993年9月1日初版、学校体育研究同志会・編著、大修館書店出版）の章の中に登場するかつての教え子の言葉です。この章で報告したのは、「主体である子どもたちこそが技術システムを掴みとらなければ、私たちの目指す『体育の学力』にならないのではないか」という、それまでの教育課程の批判的検討からサッカー学習を歴史の追体験を通して子どもたち自身に掴み取らせることをテーマにした内容でした。授業で展開されるゲームや練習内容の成果と課題を子どもたちが自主的に論議を重ねながら見つけ出し、次の授業計画をしました。一人ひとりの発言がとても大事にされることとなりました。この授業展開によって、グループで考える・話し合う力を確実に身につけていきました。また、サッカー学習を通じて自治にも目覚め、運動場の使い方を政策にした児童会選挙にも立候補して2名が当選し政策実現という結果を生みました。この授業の中で育った彼だからこそ、個人の考えが大事にされない上意下達の人間関係にあるサ

ッカークラブを続けられなくなったのだろうと思いました。彼のクラブを辞めた行為は、客観的には、そのクラブのあり方に対する抗議だったと思えるのです。「先生 僕サッカー部辞めた」の言葉は、サッカーの国際親善試合が大阪長居球場であった時、たまたま彼に再会し聞いたのでした。小学校で上記のような経験を子どもたちがしたとしても、中学校・高校では、そのような教育環境が保障される訳ではありません。戦後しばらくの間は、学習指導要領でも民主教育が詠われ自治活動が大事にされましたが、冷戦以降は、政府財界による教育介入の押し付けが主流になりました。現在では、戦前を思い起こすような道徳教育の評価評定が行われようとするところにまで来ています。こんな教育情勢だからこそ同志会のベテラン教師群が若い教師の人たちに財産を引き継ぐ・その為の様々な援助、そして若い人たちが職場で同志会実践ができるためのポイントが必要になってくるはずです。今回の特集の趣旨もそこにあります。どうしたら同志会実践を職場で出来るようになるかのコツも見つかります。是非読んで実践に生かしてください。

（やまもと まさゆき／大阪支部）